

どうなる？

どうする？

道徳の教科化

子どもの姿を どう捉え、評価する？

「特別の教科」である道徳科のスタートを控え、その評価の仕方が具体的にイメージできないという声を多く聞く。評価に関してどのようなスタンスで臨み、通知表の記述などはどのように行えばよいのか。そして、教育委員会に求められる対応は何か。前編に続き、中央教育審議会道徳教育専門部会委員として、道徳の学習指導要領の改正にかかわった東京学芸大学の永田繁雄教授に具体的に解説いただくとともに、小学校での実践例を紹介する。

有識者インタビュー

授業の中での子どもの変化を継続的に捉え、 子どもの成長を促す「支援的評価」を

東京学芸大学 教授 永田繁雄



ながた・しげお 東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻修了。東京都内小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官を経て、2009年度から現職。中央教育審議会教育課程部会道徳教育専門部会委員、日本道徳教育学会副会長兼事務局長などを兼任。主な編著書に『小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科道徳』（東洋館出版社）、『「道徳科」評価の考え方・進め方』（教育開発研究所）など。

評価のスタンス

道徳性に「係る」 成長の様子を評価する

前編では、道徳が「特別の教科」として教科化された背景や具体的な変更点、さらに、「考え、議論する道徳」の授業づくりのポイントなどをお伝えしました。後編では、そのような授業によって変化した子どもたちをどのように評価していくのかについてお話します。

道徳科で目指すべき評価のあり方は、下記に示す学習指導要領の記述

児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

注（ ）内は中学校。下線は編集部によるもの。
*「小学校学習指導要領」より。

にも端的に表れています。一つひとつの文言をひも解いていきましょう。

「学習状況」に着目する

道徳性は、心の根っこにあたる部分であり、見えにくく、評価するのは困難です。従って、「学習状況」などの見える部分を手がかりにして評価することが重要です。具体的には、子どもが実際に書いたり、話し合ったり、発表したりする姿を評価の根拠にすることになります。

「道徳性に係る成長の様子」を把握

「係る」という言葉に注目してください。前述の通り、道徳性を直接評価することは難しいため、道徳性を取り巻く様子も含めて、幅広く柔軟に評価する姿勢の重要性を示しています。具体的には、「自分とは異なる価値観を受け入れていた」「ある行動のよさに気づいた」など、子どもが見せた成長の姿を言葉で表現するこ

とになります。その際、日常の行動・行為などは分けて考えるように努め、道徳科における学習状況の中で評価する必要があります。

「継続的」な視点で評価する

道徳科の評価では、継続的な視点を持つことも大切です。小・中学校の「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（文部科学省）に「個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価」と書かれている通り、特定の内容項目だけで判断せず、長期にわたって子どもの変化を見続けていくことが求められます。毎時間の小さな変化を捉え、積み上げていくことによって、大きくくりな変化・変容の方向が見えてきます。

「数値などによる評価は行わない」

道徳性は極めて個別的・个性的なもので、点数や記号などのいわゆる数値的な評価はなじまないため、記述によって示すようにします。気をつけたいのは、私たち教員が子どものノートにつけがちな「花丸」なども、子どもにとっては花びらや丸の数から数値的評価の意味合いを持つことです。また、教員自身の価値基準によって、「よい」「悪い」を判断して伝えることになる不安も伴います。

評価の基本的な考え方

評価を記述する際は2つの着眼点を大切に

前述の「評価のスタンス」を踏まえた上で、学習指導要領解説では、評価を進める際の基本的な考え方や着眼点などを提示しています（図1）。

ここに示されているように、道徳科の評価では、道徳性の持つ人格的特性を考慮し、観点別に分節した評価は避けるようにします。そして、学習活動全体を通して見取り、内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた個人内評価とするこ

とが求められています。

また、子どもの様子を見取り、記述する際には、図1の右側に示した2つの着眼点を手がかりとして考えるとよいでしょう。

①「多面的・多角的な見方へと発展させているか」については、いろいろな人の考えを参考にしながら、自分の考えを深めているかという点を捉えるようにします。

②「自分自身とのかかわりの中で深めているか」については、道徳的な事柄への問題意識を持ったり、主人公に自分を投影したり、主題を自分自身の問題として振り返ったりしているかという点を捉えるようにします。

評価情報の収集方法

子どもを多面的に見取るために5つの評価情報を組み合わせる

評価に際しては、必要な情報をいかに収集するかがとても大切です。その方法としては主に次の5つが考えられますが、どれか1つに頼ることなく、いくつかを組み合わせることで評価を行うとよいでしょう。

①ノート・ワークシート

評価情報として最も重要なものは、

子どもが書いたノートやワークシートです。授業中の発言が十分ではない子どもも含め、全員の思考などを分け隔てなく見取ることができるからです。また、授業ごとの評価情報が蓄積され、子どもの思考の変化も捉えやすくなります。

ノートを確認する際には、図1の①と②を意識して、子どもの変化を捉えるようにします。そうすることで、例えば、年度当初は感想しか書けなかった子どもが、徐々に自分事として語れるようになったり、自分の考えをしっかりと主張できるようになったりしていることに気づきます。子どもの内面の成長は短期間では見えにくいものなので、長い目で見ていくように心がけることが大切です。

②発言・発話

授業中の発言・発話の記録も大切です。ただし、発言者が偏りやすい場合、発言の少ない子どもへの配慮も必要です。例えば、ノートに書いた内容を発表するよう促したり、「発表してくれてありがとう」と伝えたりして、子どもの意欲を高めます。

それでも発言ができない子どもはいますし、背景として学習に困難があったり、発達障害の課題があったりすることも考えられます。そうし

図1 道徳科における評価のあり方

評価を進める際の基本的な考え方

- ・道徳的判断力などの諸様相に分節しての観点別評価は妥当ではない。
- ・学習活動全体を通して見取ることが求められる。
- ・個々の内容項目ではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とする。
- ・成長を積極的に受け止めて、認め、励ます個人内評価として記述式で行う。

見取り、記述する際に重視する2つの着眼点

- ①一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか。
 - ・様々な視点から捉えている。
 - ・自分と違う立場を理解する。
 - ・対立する場面で取り得る行動を考えようとする。 など
- ②道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているかどうか。
 - ・登場人物を自分に置き換える。
 - ・自分自身を振り返る。
 - ・道徳的問題を自分のこととして考えようとする。 など

*永田教授が小・中学校の「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（文部科学省）に示す内容を整理した資料を基に編集部で作成。

た場合には、子どものつぶやきや表情、しぐさなどの背景にある思いや考えを想像し、共感的に理解する姿勢を大事にするといよいでしょう。

③パフォーマンス

スピーチやプレゼンテーション、役割演技といった表現活動も、評価のための情報となります。なるべく子ども全員が表現できる環境をつくるようにしましょう。また、評価の際には、表現のスキルではなく、その背景にある思いや考えを見取るように工夫することが大切です。

④子どもの自己評価

道徳科は、子どもが自分自身への理解を深める中で自己評価力を高める場にもなるため、授業の終了時などに自己評価の機会を設けてもよいでしょう。その評価尺度としては、例えば、4件法^{*1}や「○・△・×」のような数字・記号による評価も考えられます。自分がどれくらい頑張ったかを指標化することで、子どもの自己評価力が高まっていきます。

その際、教員はその子どもの自己評価を量的にではなく、質的に捉え、前向きな視点で受け止めるようにすることがとりわけ大切です。例えば、×や△ばかりつける子どもは、自分に厳しく、よりよくなろうとする気持ち強いのではないかといった解釈の仕方も考えられます。

⑤ほかの観察者による評価

道徳科の授業は、担任が行うのが基本ですが、それ以外の教員がチーム・ティーチングや持ち回りなどの形で授業に入ることも有効です。指導に厚みが増すだけでなく、担任のみの主観的な評価に陥ることを防ぎ、より多面的に子どもを見られるようになります。ほかの教員が入ることで、担任にもよい意味での緊張感が生まれ、評価の質も高まるでしょう。

評価情報の管理の仕方

ポートフォリオや座席表への記録で偏りなく情報を蓄積

評価情報を散逸させず、蓄積するには、次のような方法が効果的です。学校や学級の実態などに応じて適切な方法を選ぶといよいでしょう。

◎ファイリング

ワークシートなどを用いる場合は、まとめて振り返れるようにファイルなどに綴じましょう。

◎ポートフォリオ

子ども自身にファイリングの仕方を委ねたものがポートフォリオです。ワークシートやアンケートなどの関連するものを整理したり、大事だと思った箇所が付箋紙を貼ったりして、自分だけの綴りを作るように促します。個々に題名をつけたり、表紙に

絵を描いたりすると、子どもの創意工夫を促すとおよいでしょう。子ども個々のこだわりを通して、自分事としてかかわっているかなどが見えてきます。

◎座席表へのエピソード記録

授業中の子どもの言動などのエピソードを記録することで、細かな変化をつかみやすくなります。また、座席表に記録することで、一人ひとりの子どもに関する記録の量が一目で分かり、「最近、この子どもの記録が少ない」といったことにも気づきやすくなります。発言が少ない子どもの言葉を引き出すことに努めるなど、指導の充実にも役立ちます。

評価記述の配慮と工夫

子どもを伸ばす評価記述にするための教員の構え

道徳科の評価には、「1単位時間」「学期」「学年」という3つのステージがあり、それぞれ意識すべきことが異なります(図2)。

特に、先生方が気にされているのは、通知表にどう記述するかということだと思います。そこで、前述の2つの着眼点を踏まえて、評価の記述に際して心に留めておきたいことをまとめました(図3)。あくまでも、評価の記述を改善し、充実させていく際の配慮や工夫、方向性の例として受け止め、柔軟に生かしていただければと思います。

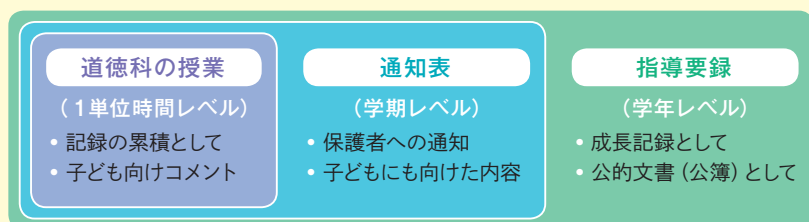
組織的な取り組みに向けて

教員が見通しを持ち、安心できるような支援を

道徳科の評価の充実に向け、組織的に取り組むべきこととして、学校に求められることは3つあります。1つめは、「指導と評価の一体化」の観点から、どのようにして評価情報

図2 道徳科における評価の仕方や記述で特に意識したいこと(考え方の整理例)

3つの評価のステージを区分して意識する



- 支援的コメントを大切に
- 子どもの自己評価を生かす
- 主題を意識した評価も

- 子どもの成長に係る評価
- 分かりやすさと具体性
- 支援的な構えを徹底する

- 長期の変化への着眼
- 根拠のある全体的記述を
- 公的な帳簿として

* 永田教授提供資料を基に編集部で作成。

* 1 評価の尺度を4段階に分けて行う方法。

図3 道徳科の評価の記述における留意点(例)

ポイント	気になるような記述の例	課題となりそうなこと		考えられる改善の方向性
具体的な根拠を基にする	「どの学習でも、生き生きと大きな声で自分の考えを発表していました」 「相手の目をよく見てうなずきながら聞き、自分の考えをさらに深めることができていました」	大まかであいまいな表現 一般的な学習の様子	あいまい・抽象的	<ul style="list-style-type: none"> 道徳の授業の中での学習状況や、道徳的な考え方の具体的な成長などに着目し、何に基づいて評価しているのかを分かるようにしましょう。
道徳科の学習の中で見られる様子を捉える	「日常生活の中でも、あいさつがとてもよくできるようになりました」 「友情に関する学習を通して、今まで以上に友だちが増えてきました」	日常の行動面の直接的な指導との関連 日常生活での変化	日常の指導	<ul style="list-style-type: none"> 日常ではなく、道徳科の学習だからこそ見られる様子について書くようにし、生活面の「行動の記録」とは区別するようにしましょう。
各教科の記述内容と区別する	「よく書けるようになってきました」 「ノートには積極的に自分の考えを詳しく書き込んでいました」 「お話の読み方がとてもいいので、感情表現に心がこもっていました」	各教科でも見られる記述 国語の能力に着目した記述	各教科との混同	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの道徳的な見方や生き方などに着目して書くようにしましょう。特に、国語科や社会科と混同しないようにしましょう。
道徳性に係る成長の記述に配慮する	「生きる上での道徳的な判断力や実践への意欲がとても高まりました」 「性格がとても豊かになり、明るくなりました」	道徳性の内容への深入り 性格全体にかかわる評価	道徳性そのもの	<ul style="list-style-type: none"> 「子どもの道徳性全体=人間性」については謙虚な向き合い方を大事にしましょう。
子どものプラス面を捉える	「今までは規則やきまりのことについてあまり深く考えられませんでした。自分の問題として受け止められるようになりました」 「自己中心的な主張が強かった時もありましたが、友だち一人ひとりの意見にも心を向けるようになってきました」	マイナス面への言及 変化をマイナスの面から描く	マイナス面の記述	<ul style="list-style-type: none"> 一貫して子どものプラス面について記述し、マイナス面については触れないように努めましょう。 さらなる成長として認め、励ますことを中心にしましょう。
記録として残す上での配慮をする	「女の子らしく、とてもきめ細かな考え方が育ってきました」 「立場の弱い友だちに一方的に言うのではなく、気遣い合って、〇〇について話し合うようになっています」	固定的な性的見方 課題のある人間関係	人権的な配慮	<ul style="list-style-type: none"> 人権に関することには、配慮を欠かさないようにしましょう。 特に、性差や障害、得手・不得手、身体的な個人差にかかわることなどは、慎重に見直すようにしましょう。
「大きくりなまとまりを踏まえた評価」とする	「きまりについて考え、それを大事にして守ろうとする姿勢がとてもよく育ちました」(通知表の場合) 『絵はがきと切手』の授業では友だちや友情の大切さへの理解を深めていました」(通知表の場合)	個々の内容項目に限定し過ぎた表現 通知表で単一の授業について記述する	個別内容のみ	<ul style="list-style-type: none"> 通知表では全体的な見取りを大事にしましょう。その上で、特徴的な事例の記述を加えることも効果的です。
子どもや保護者にも分かりやすい表現にする	「道徳的価値の自覚が深まって、〇〇に関する多面的・多角的な見方ができるようになりました」	保護者や子どもにとっての理解の難しさ	難しさ	<ul style="list-style-type: none"> 子どもや保護者にも分かりやすい、自然で平易な言葉を用いるようにしましょう。

*永田教授提供資料を基に編集部で作成。

を収集・蓄積し、その情報を指導に還元していくかについて考えることです。2つめは、通知表などの評価をどのように記述するかという方向性を決めることです。3つめは、校内研修などを通して、全教員が評価のあり方について具体的なイメージを持てるようにすることです。これらは、各学校においては、管理職や道徳教育推進担当者などが中心と

なって進めていくこととなります。

教育委員会が行う支援も、基本的には同様です。学校や地域間で大きなばらつきが生じないように、「指導と評価の一体化」のための仕組みづくりや、通知表・指導要録の書式や記述内容などについて、一定の目安や方向性を示しておくといよいでしょう。

最後に、先生方にお伝えしておきたいのは、評価を充実させるために

は、その前提として、授業の充実が大切であるということです。教員自身が授業づくりを楽しみ、主体的・対話的で深い学びを生み出すことで、子どもの姿に手応えを感じられるようになるはずですが、その手応えこそが評価となるのです。子ども自らの伸びる力を信じ、プラス思考で開発的な発想を持って授業をつくり出していただくことを期待しています。

大きくくり＋具体例の2段階の記述で、「広さ」と「深さ」を併せ持つ評価を目指す

東京都 とうのやま 中野区立塔山小学校



◎ 1926 (大正 15) 年開校。2013 年度に中野区教育委員会「学校教育向上事業」研究指定校となり、道徳教育の充実に取り組む。

校長 蝶名林義憲先生

児童数 371 人

学級数 13 学級

電話 03-3363-0461

URL <http://nk-tonoyama-e.la.coccan.jp/>



指導教諭

幸阪芽吹

こうさか・めぶき

研究推進委員長。3 学年担任。モットーは、「子どもとともによりよく生きる」。

道徳ノートや自己評価で子どもの思考の変化を把握

中野区立塔山小学校は、2016 年度に「東京都道徳教育推進拠点校」の指定を受け、道徳の教科化を見据えた指導と評価について研究している。研究推進委員長の幸阪芽吹先生は、道徳科のねらいをこう語る。

「子どもたちがこれからの社会で生きていくためには、多様な考え方を認め合い、お互いに高め合っていかなければなりません。道徳科は、そうした経験を積み重ねながら、道徳性を養うことを目標に授業を行っていきたくと考えています」

授業では、年間 35 時間（1 年生は 34 時間）ですべての内容項目を指導することを全教員で確認。全学年共通の重点内容項目「礼儀」は、特に指導内容を充実させた。そして、子どもの考えを広げ、深められるような発問を工夫し、役割演技などの体験的活動を多く取り入れている。

「文章や言葉で伝えたり、相手の立場に立って考えたりするのが苦手な子どももいます。机上で考えるより

も、登場人物になり切って演じる方が、思考が働き、言葉が出やすくなります」(幸阪先生)

また、指導と一体的な関係にある評価の研究にも力を入れている。

子どもの成長を捉えるために、全学年で「道徳ノート（1 年生はワークシート）」を導入。登場人物の思いを想像させたり、自分の考えや行動を振り返らせたりするなど、授業のねらいに応じてテーマを設定し、主に授業の後半に記入させるようにしている。教員が評価に用いるだけでなく、子ども自身が自分の成長を感じられるツールにもなっているという。

「教員は、子どもの考えを認めて励ますコメントを添えて返しています。記録が蓄積されるため、一人ひとりの考え方がどのように変化しているかを振り返ることができます」(幸阪先生)

また、「自己評価シート」(写真)も授業の最後に記入させている。「関心・意欲」「多面的・多角的な見方」「自分とのかかわり」「これからの生き方」の各観点から評価項目を設定。1・2 年生は、3 つの項目について、

それぞれに「◎・○・△」をつける。3～6 年生は、5 つの項目の中から、特に頑張ったものを 2 つ選んで○をつける。

「自己評価からは、どのような意識を持って学んでいるかが分かり、一人ひとりの特徴が見えてきます。ノートと併せて確認することで、子どもがどのような思考を巡らせたのかをより捉えやすくなります。また、項目を示すことで、授業で大切にしたい視点を子どもに意識させるというねらいもあります」(幸阪先生)

さらに、授業中の発言など、子どもの言動も評価の対象として重視し、発言内容とともに、態度や表情、うなずきなどに表れた意欲や関心を見

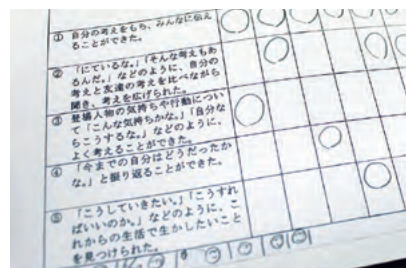


写真 3 年生の「自己評価シート」。授業の最後に記入させ、振り返りの機会としている。教員にとっては、評価に生かすだけでなく、授業改善の材料にもなる。

図 道徳科の評価の記述例

評価の視点	評価の記述例	
大きくくりなまとまりを踏まえた 評価の記述例	一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの考えを聞いて、「なるほど」「ああ、分かる」などつぶやいたりうなずいたりしながら、話し合っていました。 友だちの考えと自分の考えを比較しながら、進んで自分の考えを伝えていました。 教材の登場人物の気持ちを自分とのかかわりで考えることを通して、新たな気づきがありました。
	道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているか	<ul style="list-style-type: none"> 今の自分と重ね合わせながら、お話に出てくる登場人物の思いやりの行動などについてよく考えていました。 「自分はこうするな」と自らの経験と照らし合わせながら考えていました。 話し合いを通して、いつも「自分はどうか」と自分自身と重ねながら考えていました。
特に顕著と認められる点が発揮された 内容項目の評価の記述例	一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか	<ul style="list-style-type: none"> 「自由」についての授業では、「自由の中には、責任も伴い、自分で考え、判断する」ということの大切さに気がつきました。 「礼儀」の授業では、「あいさつでえがおに」の教材を通して話し合うことで、あいさつには様々な仕方があり、時と場合に合わせたあいさつがあることに気がつきました。
	道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているか	<ul style="list-style-type: none"> 「正直誠実」の授業では、「自分の心に正直でいられるように、自分自身の行動を振り返っていき」と授業を通して考えたことをノートに書き、今後の生活に生かしていこうとする気持ちを持ちました。 「礼儀」の授業では、「あいさつでえがおに」の教材を通して、誰に対しても同じようにあいさつをすることの難しさを感じながらも、「誰にでもあいさつできるようにになりたい」という気持ちを持ちました。

*塔山小学校提供資料を基に編集部で作成。

逃さないように心がけている。

一人ひとりの「らしさ」を具体的な記述で伝える

評価は、前述の道徳ノートと自己評価シート、教員による授業記録のほか、学期末に実施する授業アンケートなども参考にする。同校が最も苦心したのは、それらの情報を基に評価の具体的な記述内容を検討することだったと、幸阪先生は振り返る。

「それまでも授業改善を目的として、子どもの振り返りや発言の記録などを蓄積し、ねらいと照らし合わせた評価も行っていました。しかし、道徳の授業を通じた成長の様子を評価として文字にする過程では、生みの苦しみがありました」

文部科学省が示した「大きくくりなまとまりを踏まえた評価」を踏まえ、一人ひとりの成長を長い目で捉えたものにする。その際、同じく文部科

学省が例示した「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているか（『自己の生き方についての考えを深めているか』という視点を含む）」という2つの視点も大切に。これらのことを意識しながら、全教員で評価の文例を作成し、どのような表現の仕方が適切かを話し合った。

このようにして徐々に共通認識を深めたが、一方で課題も浮上した。

『「大きくくりなまとまり」を意識した評価は、授業の積み重ねによる成長を捉えられる半面、個人差を表現しづらいということに気づきました。保護者が通知表を見た時に、その子らしさが伝わりにくい記述になると感じました」（幸阪先生）

そこで、同校では、「大きくくりなまとまり」の評価に続き、その中で「特に顕著と認められる点が発揮された内容項目」の様子を具体的に記述す

る2段階の評価体系とした(図)。「大きくくりなまとまり」の評価の後、「特に」などの言葉でつないで、例えば、『「自由」についての授業では、『自由の中には、責任も伴い、自分で考え、判断する』ということの大切さに気がつきました』など、その子どもの成長が顕著に見られた内容項目を記述し、学びの姿を伝えている。

全員をしっかりと評価するには指導の充実が不可欠と痛感

子どもの言動をより注意深く観察するようになるにつれ、活動や話し合いに消極的な子ども、特別な配慮を要する子ども、外国籍の子どもなどへの支援のあり方も、改めて考える必要に迫られた。幸阪先生は、グループでの話し合いが停滞したり、一人ひとりの考えが深まらなかったりした場合には、子どもに原因があるのではなく、発問や環境設定など、あくまでも教員側に課題があると捉えている。

「すべての子どもの成長を評価できる状態にすることが、教員の役割です。授業中の一人ひとりの姿や発問への反応などを都度評価し、次回以降の授業に生かすという意識を持つようになりました」（幸阪先生）

すべての子どもが意欲的に参加し、主体的に思考を深める授業が実践できれば、おのずと評価も充実する。子どもの前向きな変化が、同校における道徳教育の研究を深める原動力となっている。

「他教科の授業や日常生活の中でも伝え合う姿が見られるようになるなど、友だちとのかかわり方が変化しています。子どもには『クラスの30人が一緒に学ぶのは、30通りの考え方に触れられるからだ』とよく話しますが、その意味を体験的に実感しているようです」（幸阪先生）